The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪平野における3世紀の首長墓と地域関係
Author(s)	福永, 伸哉
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2008, 42, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7142
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪平野における３世紀の首長墓と地域関係

福　永　伸　哉

１　はじめに

古墳時代の巨大前方後円墳が築造される大阪平野は、大和盆地とならんでこの時代の政治的、文化的中枢の一角を占める地域として理解されている。しかし、そうしたイメージとは裏腹に前方後円墳成立に向かう３世紀において、大阪平野の有力層がどのような地域的な動きを見せ、それが後の古墳時代史とどのようにかかわってくるのかという点については、さほど研究が進んでいないのが実情である。近年、大和盆地東南部の桜井市ホケノ山墳墓、南山城の城陽市芝ケ原墳墓、近江湖北の高月町小松墳墓など、墳丘と副葬品の内容がわかる庄内式期の有力首長墓の事例が増えつつあるが（橿考研編 2001、川崎・近藤編 1987、黒坂編 2001）、大阪平野の摂津、河内、和泉の地域ではそうした良好な調査例がなお不足していることも一因といえよう。

ただ、そうした資料的限界があるものの、断片的に見つかりつつある庄内式期の墳墓や、調査事例の増えてきた古墳時代前期前半の首長墳のあり方、さらに３世紀の倭人社会の重要な威信財であった舶載神獣鏡の分布などを考えあわせてみる作業は、そろそろ可能になってきた。本稿ではそうした観点から、大阪平野における前方後円墳成立前夜の首長墓、有力墓の状況と神獣鏡分布を整理することによって、地域内の微妙な政治的スタンスの違いを抽出し、それが古墳時代史へいかに展開していくのかという課題について二、三の検討を行ってみたい。

なお、筆者は布留式期の箸墓古墳築造の画期性を重視してこれ以降を古墳時代ととらえるため、庄内式期は弥生時代終末期という理解になる。庄内式期の実年代は画文帯神獣鏡の年代観などからおおむね２世紀末から３世紀半ばまでの 60 ～ 70 年程度と考えている（福永 2001b）。また、庄内式期は共立された卑弥呼を核とする倭人社会の中心的な政治権力が芽生えた段階と見るが、この政治中枢を前方後円墳成立以降の「初期大和政権」と区別して「邪馬台国政権」と呼称する場合があることを断っておく。

２　弥生終末期の摂河泉の首長墓

一般成員の世帯墓としての性格を持っていた弥生中期までの方形周溝墓と比較して、庄内式期の周溝墓（墳墓）は、総数の減少や中心埋葬の明確化といった違いが認められることから、ある程度の有力層が営んだ墓葬であることは疑いなかろう。その点では、「周溝墓」という同じ考古学名辞を与えられている遺構でも、弥生中期と後期以降のそれは性格の異なるものといえる。弥生中期の多数の周溝墓群に葬られていた広範な階層のうち、後期以降の周溝墓から漏れ落ちた一般成員の墓葬の実態については、「密集土壙群」「群集土壙群」などと呼ばれる遺構がその有力候補となる一方で、この種の遺構の性格については「風倒木痕」「粘土採掘坑」という異なる見解もあり、共通理解には至っていない（福永 1989、西口 1990、京嶋 1991 など）。

弥生後期以降の社会全体の構造をとらえるためには、当該期の一般成員墓の実態解明がなお必要である。ただ、本稿の目的とする地域勢力の連携や親疎関係を明らかにするには、政治的な影響力を有していた人物の墓葬と推定される首長墓の特徴や推移を追求する作業が有効な方法として認められるであろう。

とはいえ、大阪平野における弥生終末期の首長墓の検出例は、他地域と

比べてけっして豊富とはいえず、また墳丘、埋葬施設、副葬品などの全体像が判明する例に至ってはきわめてわずかといわざるを得ない。本来は「首長墓」の考古学的要件を厳密にさだめた議論が必要であろうが、そうした資料的な制約もあるため、本章では、副葬品が認められるもの、突出部を有するなど通常の周溝墓からの形態的な差異化がうかがわれるものなどを仮に首長墓として取り扱い、状況の整理を行うことにしよう[1)]。

摂津の首長墓　摂津では、まず豊中市服部遺跡があげられる。1994 年の府営住宅建設に伴う第４次調査において終末期の墓域が検出され、４基の周溝墓が確認されている（服部・清家 1996）。このうち１号墓が南方向に短い突出部を持つ前方後円形の周溝墓である（図１－②）。一部が調査区外にかかるため推定復元値となるが、直径約 15.5 ｍの円丘部に幅約５ｍ、長さ 2.2 ｍの突出部がとりつき、墳丘長は約 18 ｍをはかる。周囲には周溝の１カ所に陸橋部を持つ円形墓が３基存在しているので、円形墓群をいとなむ有力者の中で階層的により上位の被葬者が想定できる。埋葬施設は削平消失している。

茨木市郡遺跡では、1999 年の調査で径約 17 ｍの円形周溝墓（一部が発掘区域外のため突出部が付く可能性は残る）が検出され、10 ｍあまり離れた地点から倣製鏡（径 12㎝、重圏文系？）、碧玉製・緑色凝灰岩製管玉、ガラス小玉などを副葬する土器棺（壺棺）が見つかっている（茨木市教委 2000）（図２－⑤）。壺棺墓の時期は、概報では「古墳時代前期初頭」とされている[2)]。大阪平野の弥生終末期において副葬品が確認されている墓葬の確認例自体がきわめて少ないなかで、壺棺とはいえ、当該期としては大きな鏡を含む複数種の副葬品を持つ点は特筆される[3)]。この壺棺を周辺埋葬とする上述の円形周溝墓は埋葬施設が失われているが、副葬品を持つ主体部であった可能性も十分に考えられよう。

河内の首長墓　河内は淀川に注ぐ支流に沿った北河内と、旧大和川が河

内潟へ流れ込むデルタ地帯を中心とする中・南河内に大きく分けることができる。

北河内では、天野川東岸の交野台地西端に立地する枚方市中宮ドンバ遺跡が重要であり、平野部からの比高約 30 mの丘陵上に、周溝を持つ方形墓が２基ならんで検出されている（大竹 1988）（図４－⑭）。北の１号墓は南北約 22 m、東西約 18 m、周溝幅約３mの大型方形墓で、周溝の１カ所に陸橋部を設ける構造、南の２号墓は南北 8.8 m、東西推定約９mの規模である。１号墓の中心には組合せ式木棺を直葬した埋葬施設があり、棺内から鉄剣１、鉄ヤリガンナ１、棺底からやや浮いた状態で超大型の柳葉式鉄鏃２などの副葬品が検出された。後者は棺蓋上に置かれていた可能性がある。時期は、２号墓周溝から出土した加飾二重口縁壺などから庄内式新相と判断される。

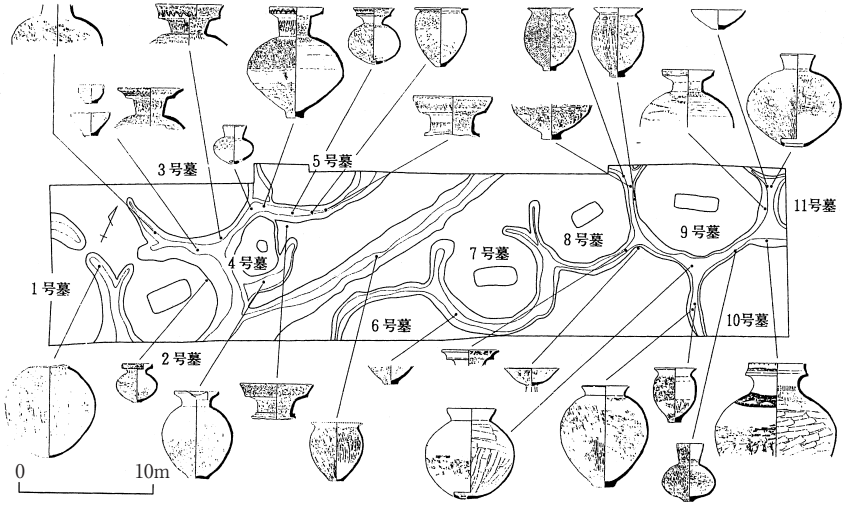
西隣の寝屋川市域では、小路遺跡の前方後方形周溝墓が知られている（木下編 2004）。墳丘長は 22.7 m、後方部長 12.2 m、幅 10.2 m、前方部長 10.5 m、前端幅７mの比較的小規模のものである（図４－⑫）。周溝幅は 2.5 ～ 3.5 m、埋葬施設は削平されている。南側には一辺３～５m程度の方形周溝墓が３基付随しており、さらに遺跡名が高宮遺跡となる北側にも 10 基あまりの方形周溝墓が確認されている。これらの周溝からは庄内式新相から布留式古相の土器が出土している。方形周溝墓を主体とする有力層の墓域の中に、突出部を付けたひときわ有力な被葬者が存在しているという理解になろう。

中・南河内でも、方形周溝墓群の中に少数の前方後方形周溝墓が造営されているという構造が認められる。

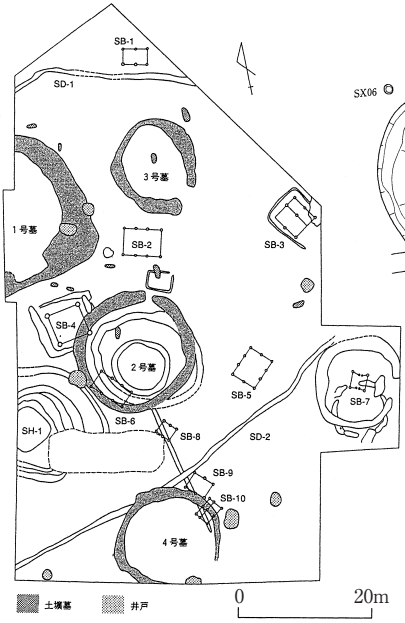
庄内式～布留式古段階の周溝墓群が広がる大阪市加美遺跡（図３－⑪）では、46 基が調査された。22 号墓が円形プランの周溝を持つほかは、方丘系で占められている。突出部を持つものは庄内式新段階の 14 号墓で、

墳丘は長さ 15 m前後の前方後方形になる（田中 1986）。埋葬施設は削平を受けており不詳である。加美遺跡において埋葬施設が残存していた方形墓の中には副葬品を持つものが２基ある。２号墓は一辺８m程度、舶載内行花文鏡片と管玉を副葬する庄内式期の方形墓である。５号墓も一辺８mの方形墓で、小形の倣製鋸歯文鏡が出土しているが、時期は布留式期に下る[4]。

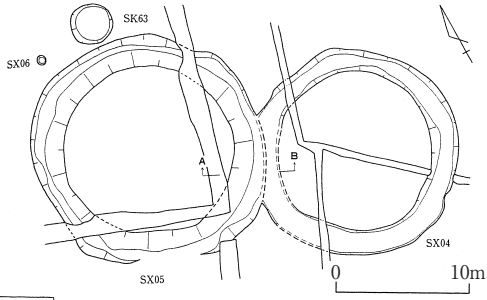
この加美遺跡と一連の遺跡になる可能性が高い八尾市久宝寺遺跡においては、複数の調査機関によって墓域の調査が数次にわたって行われ、方形周溝墓群の中に前方後方形周溝墓が少数混在するあり方が判明している。久宝寺南１号墓（図２－⑦）は、墳丘の南半分が調査区域外にあるが、一辺 12 mあまりの方形主丘部に幅 6.5 m、長さ 4.5 mの方形の突出部を付けた前方後方形のプランに復元でき、墳長は 16 ～ 17 m程度になる（一瀬編 1987）。主丘部のほぼ中央に、墳丘主軸を直交する方向で木棺直葬が検出されている。副葬品は認められない。時期は後期末から庄内式最古段階前後にさかのぼる。明確な突出部を有するものとしては大阪平野ではごく初期の例である[5]。久宝寺遺跡竜華地区では庄内式古段階から布留式古段階の方丘系の墳墓が約 60 基確認されており、このうち１基が前方後方形の久宝寺 44 号墳である（森屋・亀井編 2007）。墳丘の一部が調査区域外にのびるものの、おおよそ墳長 33.5 m、後方部長 19.5 m、前方部長 14 mの規模に復元でき、河内の前方後方形周溝墓のうちでは最大級の一例になる（図２－⑥⑧）。埋葬施設は削平。時期は庄内式末から布留式最古段階。久宝寺南３号墓は一辺約８mの方形墓にごく短い突出部を付したもので布留式最古段階（赤木ほか 1987）（図３－⑨）。これらのほかに、遺跡南西部で（財）八尾市文化財調査研究会によって行われた第９次調査では、布留式古段階に造営された墳長約 30 mの前方後方形の周溝が見つかっている（八尾市文研 1992）（図３－⑩）。このように加美遺跡、久宝寺遺跡で



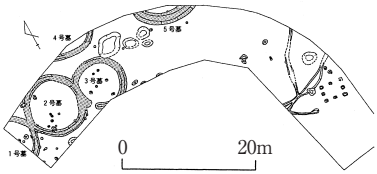
①神戸市深江北町遺跡



②豊中市服部遺跡

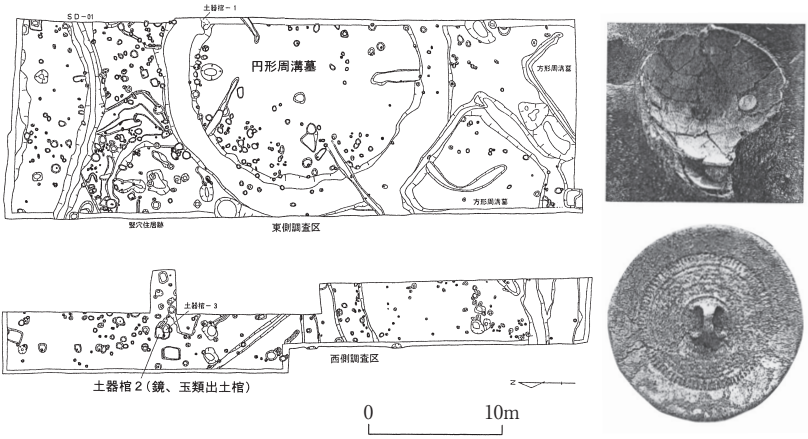


③三田市川除・藤ノ木遺跡

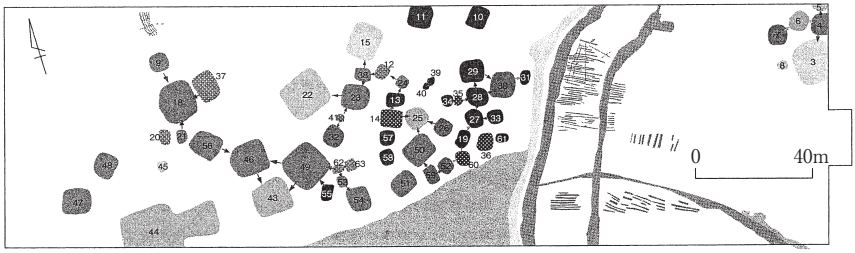


④豊中市豊島北遺跡

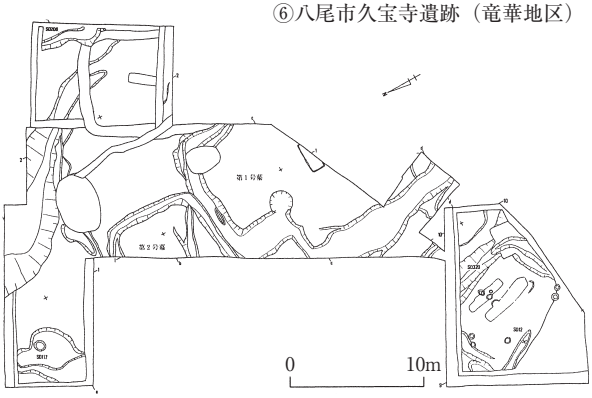
図１　大阪平野の３世紀の有力墳墓（1）　摂津



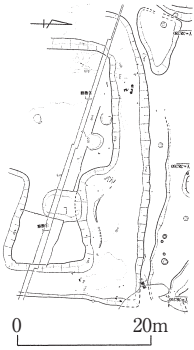
⑤茨木市郡遺跡



⑥八尾市久宝寺遺跡（竜華地区）

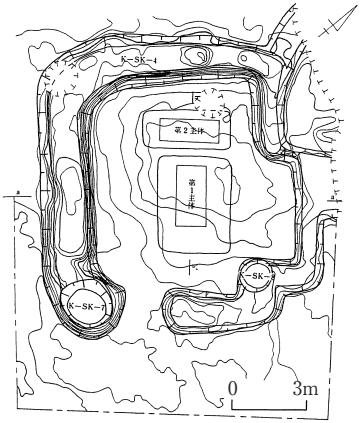


⑦八尾市久宝寺南１号墓

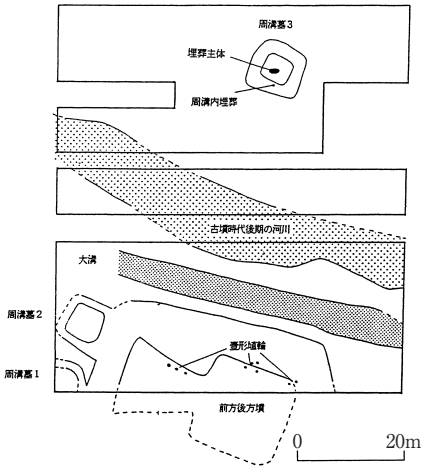


⑧八尾市久宝寺 44 号墳

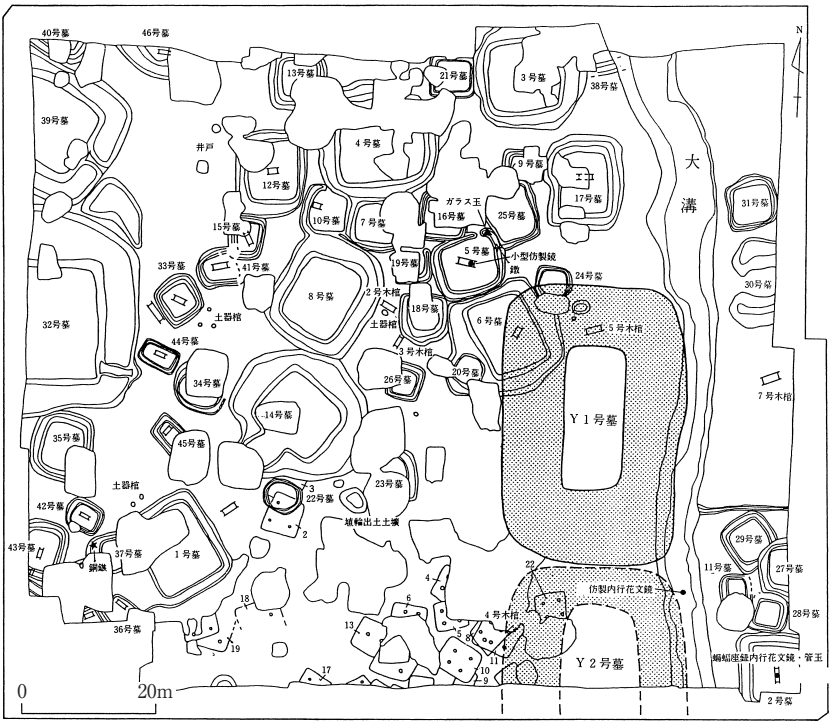
図２　大阪平野の３世紀の有力墳墓（2）　摂津、河内



⑨八尾市久宝寺南３号墓

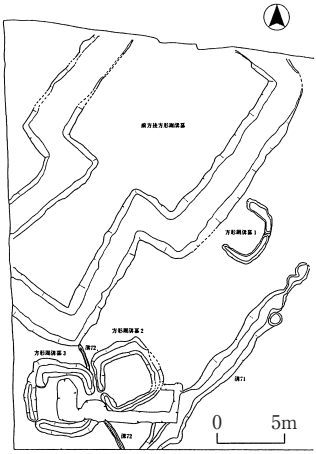


⑩八尾市久宝寺前方後方墳

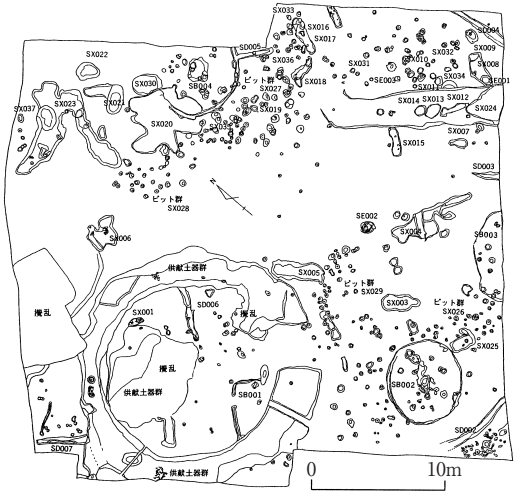


⑪大阪市加美遺跡

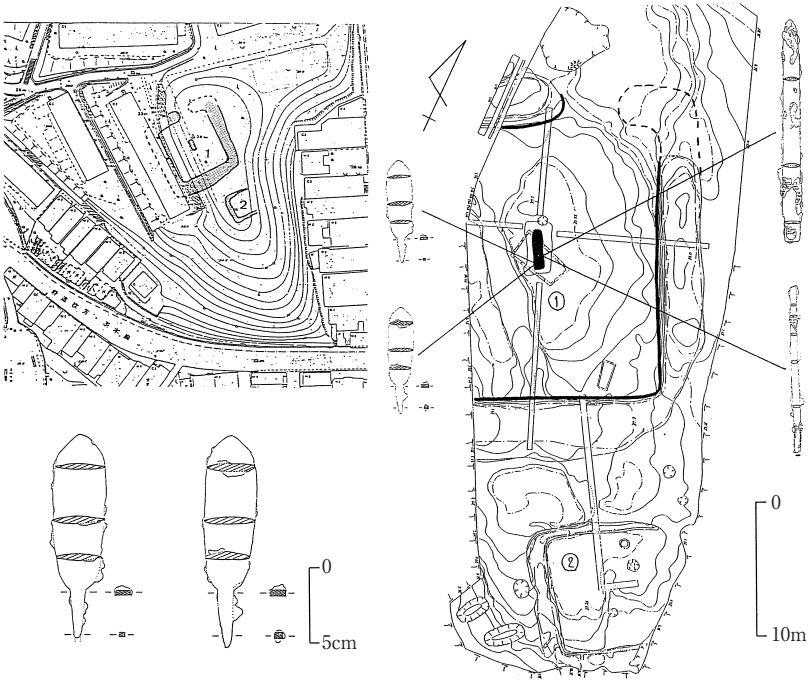
図３　大阪平野の３世紀の有力墳墓（3）　河内



⑫寝屋川市小路遺跡



⑬岸和田市下池田遺跡（第二次）



⑭枚方市中宮ドンバ遺跡

図４　大阪平野の３世紀の有力墳墓（4）　河内、和泉

は庄内式最古段階から布留式古段階に至る時間幅の中で、方形墓群に混じって少なくとも５基の前方後方形の首長墓が継続して営まれた点が注目すべきあり方といえる。

方形墓が圧倒的に多い中・南河内地域ではあるが、八尾市成法寺遺跡では径 17 ～ 18 mに復元できそうな円形周溝の一部（SX1）が検出されていて庄内式期にさかのぼる可能性がある。これが墳墓としたら、河内では異例の大型円形墓となる（嶋村編 1986）。

和泉の首長墓　和泉の状況は不明確である。わずかに、岸和田市下池田遺跡第２次調査において、径 16 mの円形周溝の一部がとぎれて長さ約４mの撥形の陸橋状になった庄内式期の遺構が検出されており（図４－⑬）、前方後円形周溝墓に発展する系統の可能性がある（中村編 1987）。下池田遺跡では、ここから北西に約 50 m離れた第１次調査地点でも円形周溝墓が３基確認されている（石部 1979）。少なくともこれら小規模な周溝墓よりは階層的に上位の被葬者が考えられよう。

３　円丘の摂津、方丘の河内

前章では、突出部の付加や副葬品の存在によって通常の周溝墓より上位階層にあると思われる首長墓を概観してみた。調査数は少ないながらも摂津に前方後円形の事例が存在し、河内では前方後方形が卓越する傾向が顕著なように思われる。前方後円形や前方後方形という墳丘形態の違いが、被葬者集団が採用する主丘部の形態差を反映していると考えるなら、首長層に次ぐ有力層レベルの墓葬と目される、突出部を付さない周溝墓についても地域性を整理しておくことは有効であろう。

摂津では六甲南麓において、神戸市深江北町遺跡（図１－①）（山下編 1988）、郡家遺跡（森田 1986、西岡・池野 1987）などで庄内式期の円形周溝墓が複数検出されている。とくに、深江北町遺跡では溝をはさんで東西

に円形周溝墓群が広く展開しており、調査で検出されたものだけで 12 基を数える。ほとんどが径 10 m弱の小規模なものであるが、調査区外の墓域にこれら有力者のリーダーの墓葬として前方後円形周溝墓が存在する可能性も十分に想定できよう。

摂津北西部、三田盆地の三田市川除・藤ノ木遺跡でも庄内式期の円形周溝墓が２基（SX04、SX05）隣接して確認されている（山田・甲斐・高瀬 1992）（図１－③）。径約 12 m、15 mと比較的大きく、群在しないことから、集落内ではより限られた上位階層の墳墓と考えられる。円丘の斜面に貼り石を施しており、播磨地域の造墓スタイルとの関連もうかがわれる。

猪名川流域では、前章であげた豊中市服部遺跡において前方後円形周溝墓に近接して径 10 ～ 14 mの円形周溝墓が３基営まれているほか（図１－②）、豊中市豊島北遺跡（清水 1996）では径６～ 10 m程度の庄内式期の円形周溝墓５基（図１－④）、伊丹市口酒井遺跡（浅岡編 2000）では弥生後期の円形周溝墓１基がそれぞれ検出されている。さらに東の淀川流域にかけては、茨木市郡遺跡、東奈良遺跡、総持寺遺跡などで円形周溝墓の事例が見つかっている。このように庄内式期の摂津では六甲南麓から猪名川、淀川の流域に至るほぼ全域で円形墓が著しく卓越していることがわかる。

対照的に、河内地域では庄内式から布留式古段階の方形墓が圧倒的に多い。中河内の大阪市加美遺跡から八尾市久宝寺遺跡にかけては、すでに 120 基以上の墳墓が調査されている。少なくとも数百基の墳墓が営まれた、この時期としては大阪平野で最大規模の墓域になると考えられるが、前述したように数基の前方後方形周溝墓のほかは、ほとんどが方形墓である。このほかにも、八尾市東郷遺跡、成法寺遺跡、郡川遺跡などで方形墓が確認されている（米田 2008）。こうした状況は、寝屋川市小路遺跡、枚方市中宮ドンバ遺跡でも認められることから、北河内でも少なくとも庄内式期においては、墳墓形態にかんして中河内と同様の傾向を示していると判断

できる。なお、河内地域にも若干の円形周溝墓が存在している。大阪市長原遺跡（大庭編 2005）、加美遺跡（田中 1986）、八尾市成法寺遺跡、東郷遺跡、郡川遺跡（米田 2008）などであるが、多数派を占める方形周溝墓に混在して造営される傾向が強く、摂津地域で見たように複数の円形墓だけで構成される墓域は認められない6）。

和泉の庄内式期の類例は少ない。先述の下池田遺跡のほかに和泉市府中遺跡で後期にさかのぼる円形周溝墓が見つかっているが、同遺跡では方形周溝墓も併存しており、いずれが卓越する地域になるのかを判断するにはさらに検出例が必要である。

以上のように、大阪平野における有力層の墳墓形態の傾向を概観すると、大づかみにいって円形が普及している摂津、方形が卓越する河内という整理が可能である7）。こうした有力墓形態の地域的傾向が、突出部を付けた首長墓の形態にも貫徹し、摂津地域の前方後円形周溝墓の存在や河内地域の前方後方形周溝墓の広がりを生んでいるものと推測される。大阪平野の円丘系の墳墓は、弥生時代後期以降に中部～東部瀬戸内方面からの影響により登場したと考えられる（岸本道 1999）。その意味では、大阪平野の北西部に位置する摂津地域が西からの影響を受けやすく、よって円丘系の墳墓が普及したという説明も一応は可能である。しかし、弥生中期までに方形周溝墓を普遍的に営んでいた摂津地域の集団が円丘系の墳墓スタイルを採用するにはそれなりの意志が働いたことであろうし、瀬戸内からの情報や物資の流入という点ではその中心的な集散地であったにもかかわらず、河内潟沿岸部に円丘系墳墓の本格的な普及が認められないことにも、偶然とはいえない事情が反映しているようにも思われる。やや踏み込んで約言すれば、弥生終末期における摂津、河内の墳丘形態の相違には、地域集団のまとまりや地域内外との政治的親疎を表示するような意味合いが込められていたと理解できるのではなかろうか。

庄内式期の畿内において、最も有力な円丘系首長墓を築いたのが大和盆地東南部であることは、桜井市ホケノ山墳墓（橿考研編 2001）や一連の纒向墳墓群の調査（橋本編 2006 ほか）によって実証的にも疑いのない事実となった。円丘系墳墓の伝統のなかった大和盆地東南部では、この時期に至って首長層が円丘に突出部を付けた前方後円形の厚葬墓を築造する動きを開始する。そして、こうした墳墓形態に着目するなら、前方後円形の有力墳墓の築造が続く大和盆地東南部と親縁性が認められるのは、大和川を介して連結する河内地域ではなく、意外にも北部の摂津地域であったという理解が導かれるのである。

大阪湾地域に円丘系墳墓のスタイルが流入した弥生終末期において、それを積極的に受け入れる大和盆地・摂津地域に対して、伝統的な方丘系墳墓を守り続ける河内地域という対処の違いが生じたことの意味は、ほどなく大和盆地で成立をみる巨大な古墳が円丘系の前方後円墳としてスタートする事実を念頭に置くなら、けっして小さくないであろう。そして、大阪平野の南北と大和盆地をめぐる微妙な親疎の関係が、古墳時代開始期の有力古墳の特徴的な築造動向や政治的な威信財といえる３世紀の神獣鏡の分布傾向にもつながっていると考えてみたいのである。

４　前方後円墳成立期の河内と摂津

１期の有力古墳　庄内式期の河内では、おもに 1980 年代以降の平野部の調査において、大和川水系の弥生終末期（庄内式期）から古墳前期にかけての集落の繁栄があきらかになっている。とりわけ河内潟南岸一帯には吉備をはじめ他地域からの土器も多数搬入されており、大和川流域が畿内地域の中でも人や物の交流と集中がひときわ活発な場所であったことを示している。また、畿内地域の土器様式の変化をリードするのもこの地域である。しかし、そうした「前史」があるにもかかわらず前方後円墳への移

行は必ずしもスムーズとはいえないようである。

中・南河内では、現在のところ古墳時代初頭に相当する１期（前方後円墳集成編年：広瀬 1992、以下同じ）の前方後円墳が不明瞭である。上述した久宝寺遺跡では墳長 30 ｍを超えるような前方後方形周溝墓が築造されているものの、それらは中小の方形墓群と混在しながら墓域をなしており、前期古墳の典型といえるような、他と隔絶した立地や規模を有する有力古墳も見あたらない。弥生終末期段階における「地域力」を念頭に置くなら、中・南河内において前方後円墳のスタートが遅れることは、いささか不自然な現象にうつる。

さらに、１期の前方後円墳が不在であるだけでなく、２期になって登場する地域最古の前方後円墳も富田林市真名井古墳、柏原市玉手山９号墳などのように墳長 60 ｍ台のものにとどまっており、大和盆地東南部の前方後円墳はもとより、山城南部、摂津、そして吉備などと比較しても規模が小さいことは否めない事実である。

摂津の状況はこれとは対照的である。淀川流域の高槻市岡本山古墳（120 ｍ）、六甲南麓の神戸市西求女塚古墳（95 ｍ）などのように１期から 100 ｍ級の前方後円（方）墳の築造が開始される。後者は発掘調査が行われて三角縁神獣鏡７面、革綴冑の可能性がある小札片などが確認されており、初期大和政権と関連の深い威信財を持つ重要古墳であることが判明している[8]。

興味深いのは淀川水系に含まれる北河内の動向である。古墳時代になると、北河内ではまず淀川支流の天野川流域に交野市森古墳群が出現する。このうち１号墳は墳長 106 ｍをはかる前方後円墳で、本格的な発掘調査は行われていないが、採集された二重口縁壺から見て１期にさかのぼると推定できる。さらに近年では、森古墳群からさらに丘陵を上った地点で、墳長 65 ｍの交野市鍋塚古墳が発見されている（交野市編 2003）。前方後方

墳とされるが、墳丘のトレンチ調査はなお限定的であり、前方後円墳である可能性も捨てきれない。墳頂部に結晶片岩の板石を用いた竪穴式石室と思われる埋葬施設が確認されている[9]。時期を決める手がかりはないものの、埴輪は確認されておらず森１号墳に近い１期の築造である可能性が高いとみる。なお、舶載三角縁神獣鏡６面、獣帯鏡２面を出土している枚方市万年山古墳は詳細が不確かであるが、銅鏡組成から見るかぎり２期までの築造である可能性は高い。大阪平野で舶載三角縁神獣鏡を最も多く副葬している万年山古墳が平野南部ではなく北部の北河内に存在する意義は少なくないと考えられる。

以上のように、大阪平野における古墳時代初頭の有力古墳の出現状況からは、いち早く大和盆地東南部と共通のスタイルの首長葬制を採用した摂津、北河内に対して、それがしばらく遅れる中・南河内という平野南北の対照的なあり方が鮮明になる。こうした現象を前章で整理した庄内式期の首長墓形態の地域性と比較すれば、円丘系の墳墓が主流であった摂津地域に初期の有力古墳が早くあらわれ、方丘系が卓越していた河内では有力古墳の出現が遅れ、２期になって登場する地域最古の前方後円墳も規模が比較的小さなものになるという整理が可能である。また、前代には全体として方丘系墳墓の地域に含まれていた北河内は、早くも古墳時代初頭には森１号墳のような100 m級の前方後円墳を生み出す円丘系の地域へと変化し、平野北部の墳墓スタイルに同調していくことになるのである[10]。

３世紀の舶載神獣鏡　このあたりの事情を分析する一方法として、３世紀に倭の有力者の間で重視された舶載神獣鏡の分布を検討してみよう。

筆者は旧稿で、弥生後期の突線鈕式銅鐸や広形銅矛などの倭製大型青銅器が、畿内・東海や北部九州といった地域の首長ネットワークのシンボルとして機能したととらえた上で、これらが後期末に突如として生産を停止する現象の裏に、従来の地域枠を越えた広範囲の政治統合が生まれた可能

性を推定し、『魏志』倭人伝にいう「卑弥呼共立」との関連を指摘した（福永 1998）。そして、舶載神獣鏡が倭製大型青銅器にかわる共通シンボルの意義を付されたと考え、編年と製作年代をふまえて、倭人社会初の中央政権として活動を開始した邪馬台国政権がまず３世紀前葉段階で首長層の最上位シンボルと位置づけたのが中国製の画文帯神獣鏡であり、３世紀中葉以降には三角縁神獣鏡がその役割を引き継いだという理解に至っている（福永 2001a）。換言すれば、画文帯神獣鏡はおおむね３世紀前葉に製作され庄内式期に列島にもたらされたもので、240 年頃までの邪馬台国政権前期の政治活動を反映しているのに対して、三角縁神獣鏡は魏への朝貢がかなった 240 年代以降の邪馬台国政権後期および初期大和政権段階の政治関係を示していると見るのである。もちろん、舶載鏡の流入が増加する庄内式期から布留式期にかけては多様な鏡種が存在している。しかし、ホケノ山墳墓、黒塚古墳などの調査事例を念頭に置けば、画文帯神獣鏡そして三角縁神獣鏡がそれぞれの時期の有力首長が持つべき銅鏡として筆頭に位置づけられる可能性は高いといえよう。

以上の理解がおおむね妥当であるとすれば、画文帯神獣鏡と三角縁神獣鏡の分布を地域ごとに比較することで、邪馬台国政権中心勢力と目される大和盆地東南部の首長層と各地域の政治的親疎関係の推移を追うアプローチが可能になる。そこで、前章までに検討した墳墓形態の地域性と比較できるように、摂津三島、六甲南麓、北河内、中・南河内、和泉の５小地域に分けて、２種類の舶載神獣鏡の分布を表１に整理してみた[11]。

これを見ると、両鏡の分布の特徴にかんしておよそ３つの異なるタイプを指摘できる。まず第一は、六甲南麓地域に認められるように、画文帯神獣鏡が潤沢にもたらされた後、引き続いて舶載Ａ段階、舶載Ｂ段階（福永 1996）の古相三角縁神獣鏡も多数入手している状況である。神戸市西求女塚古墳に見られる画文帯神獣鏡２、上方作系獣帯鏡（六像式）１、舶載Ａ

段階三角縁神獣鏡３、舶載Ｂ段階三角縁神獣鏡３を含む副葬鏡群は、邪馬台国政権前・後期を通じて政権との強い連携を維持した有力首長の存在をうかがわせる。

第二のタイプは、中・南河内がそうであるように、画文帯神獣鏡は多いが古相三角縁神獣鏡になると順調に入らなくなるあり方である。中・南河内地域では６面の画文帯神獣鏡（寛弘寺 10 号墳は半円方形帯神獣鏡）に対して、古相三角縁神獣鏡はＡ段階のものを欠き、Ｂ段階の３面のみになる。日本における現時点での出土数では古相三角縁神獣鏡が画文帯神獣鏡の３倍以上となっていることを勘案すれば、逆に画文帯神獣鏡に対して古相三角縁神獣鏡が半減する中・南河内の状況はやはり特異といわざるを得ないのである。和泉地域は、出土古墳の事例が和泉市和泉黄金塚古墳、岸和田市風吹山古墳の２例しかないが、鏡種の構成から見るとこのタイプとしてとらえられる可能性が高い。

第三のタイプは、これとは対照的に、画文帯神獣鏡は不在またはわずかであるが、古相三角縁神獣鏡になるとにわかに入手量が増えるという特徴を持つ。典型例は淀川右岸の摂津三島地域である。大阪平野でも前期の有力古墳が集中する地域であるが、意外にも画文帯神獣鏡の出土は知られていない[12]。その一方で舶載三角縁神獣鏡Ａ・Ｂ段階、青龍三年鏡などの魏鏡ばかりを副葬した高槻市安満宮山古墳を皮切りに、闘鶏山古墳、弁天山Ｃ１号墳にかけて舶載三角縁神獣鏡が継続的にもたらされるようになっている[13]。また、北河内も、三角縁神獣鏡段階になって神獣鏡の入手量が増大するこのタイプに含めるのが妥当であろう[14]。

地域の政治関係　以上のような舶載神獣鏡の分布がなんらかの政治的側面を反映しているとすれば、中央政権の主導権を握り、神獣鏡の入手・配布にあたった大和盆地勢力と大阪平野の南北地域との親疎関係は、古相三角縁神獣鏡の配布が始まる庄内式新相段階を境に大きく変化したと見るこ

表１　摂河泉出土の画文帯神獣鏡と三角縁神獣鏡

地域	古　墳　名	後漢末期の鏡 （３Ｃ前葉）	舶載三角縁神獣鏡・魏鏡 （３Ｃ中葉～末）	倣製三角縁神獣鏡 （４Ｃ前葉～後葉）
摂津三島	高槻市・安満宮山古墳		舶Ａ・吾作四神四獣鏡 舶Ｂ・獣文帯四神四獣鏡 魏・青龍三年方格規矩四神鏡 魏・半円方形帯同向式神獣鏡	
	高槻市・闘鶏山古墳		舶Ｂ・櫛歯文帯四神四獣鏡？ 舶Ｂ・文様帯四神四獣鏡？	
	高槻市・弁天山Ｃ１号墳		舶Ｄ・波文帯三神三獣鏡	
	高槻市・塚原古墳群			倣Ⅱ・獣文帯三神三獣鏡 倣Ⅲ・獣文帯三神三獣鏡
	茨木市・安威０号墳	上方作系獣帯鏡（六像式）		
	茨木市・紫金山古墳		舶Ｃ・獣文帯三神三獣鏡	倣Ⅰ・唐草文帯三神二獣鏡 倣Ⅰ・鳥文帯三神三獣鏡 倣Ⅰ・獣文帯三神三獣鏡 倣Ⅰ・獣文帯三神三獣鏡 倣Ⅰ・獣文帯三神三獣鏡 倣Ⅰ・獣文帯三神三獣鏡 倣Ⅱ・獣文帯三神三獣鏡 倣Ⅱ・獣文帯三神三獣鏡 倣Ⅱ・獣文帯三神三獣鏡
	茨木市・将軍山古墳（伝）		舶Ｃ・唐草文帯二神二獣鏡	
六甲南麓	神戸市・西求女塚古墳	画文帯環状乳神獣鏡 画文帯環状乳神獣鏡 上方作系獣帯鏡（六像式）	舶Ａ・吾作三神五獣鏡 舶Ａ・吾作三神五獣鏡 舶Ａ・吾作四神四獣鏡 舶Ａ・吾作四神四獣鏡 舶Ｂ・吾作徐州銘四神四獣鏡 舶Ｂ・陳是作五神四獣鏡 舶Ｂ・吾作三神四獣鏡	
	神戸市・東求女塚古墳	画文帯神獣鏡	舶Ｂ・唐草文帯四神四獣鏡 舶Ｃ・獣文帯二神三獣一虫鏡 舶Ｃ・獣文帯三神三獣鏡	
	神戸市・ヘボソ塚古墳	画文帯環状乳神獣鏡 上方作系獣帯鏡（六像式）	舶Ｃ・唐草文帯三神二獣鏡 舶Ｃ・唐草文帯二神二獣鏡	

	芦屋市・阿保親王塚古墳		舶Ｄ・波文帯三神二獣博山炉鏡 舶Ｄ・波文帯四神三獣博山炉鏡 舶Ｄ・波文帯神獣鏡 舶・三角縁神獣鏡（鏡式不明）	
北河内	枚方市・万年山古墳		舶Ａ・吾作四神四獣鏡 舶Ａ・唐草文帯四神四獣鏡 舶Ｂ・陳是作六神四獣鏡 舶Ｂ・波文帯盤龍鏡 舶Ｃ・獣文帯三神三獣鏡 舶Ｄ・獣文帯三神三獣鏡	
	枚方市・藤田山古墳		魏・顔氏作画文帯環状乳神獣鏡	
中・南河内	東大阪市・石切剣箭神社（伝）	画文帯求心式神獣鏡	舶Ｂ・獣文帯四神四獣鏡 舶Ｃ・唐草文帯二神二獣鏡 舶Ｃ・唐草文帯二神二獣鏡	
	東大阪市・池島福万寺遺跡	画文帯神獣鏡（鏡片）		
	八尾市・矢作神社境内（伝）			倣Ⅱ・獣文帯三神三獣鏡
	柏原市・国分茶臼山古墳		舶Ｂ・新作徐州銘四神四獣鏡 舶Ｃ・吾作四神二獣鏡	
	柏原市・茶臼塚古墳			倣Ⅰ・獣文帯三神三獣鏡
	柏原市・ヌク谷北塚古墳			倣Ⅲ・吾作三神三獣鏡 倣Ⅲ・吾作三神三獣鏡
	柏原市・玉手山６号墳	画文帯神獣鏡		
	藤井寺市・珠金塚古墳	画文帯環状乳神獣鏡		
	羽曳野市・庭鳥塚古墳		舶Ｂ・吾作四神四獣鏡	
	羽曳野市・壺井御旅山古墳			倣Ⅰ・唐草文帯三神三獣鏡 倣Ⅰ・獣文帯三神三獣鏡 倣Ⅰ・獣文帯三神三獣鏡 倣Ⅰ・獣文帯三神三獣鏡
	富田林市・真名井古墳	画文帯神獣鏡	舶Ｄ・獣文帯三神三獣鏡	
	河南町・寛弘寺 10 号墳	半円方形帯神獣鏡		
和泉	和泉市・和泉黄金塚古墳	画文帯同向式神獣鏡 画文帯環状乳神獣鏡 画文帯環状乳神獣鏡	魏・景初三年画文帯神獣鏡 舶Ｂ・波文帯盤龍鏡	
	岸和田市・風吹山古墳	画文帯神獣鏡		

とができるのではないか。いま少し具体的にいえば、年代的には卑弥呼の朝貢が成功した240年前後を境に、大和川水系の中・南河内の首長層が畿内政権の中心的勢力から離脱し、「非主流派」に転ずる局面があったのではないか、と推測してみたいのである。中・南河内にかわって、大和盆地勢力の重要なパートナーへと台頭したのが、淀川水系の摂津の首長層であり、これに追随したのが水系を同じくする北河内の首長層という理解になる。やや単純化すれば大和盆地、大和川水系、淀川水系の3地域の関係に変化が生じたという言い方も可能であろう[15)]。

さらに淀川支流に目を広げると、木津川流域の木津川市椿井大塚山古墳（170 m）、桂川流域の向日市元稲荷古墳（94 m）、五塚原古墳（94 m）など1期の有力古墳の充実が著しいことが注目される。つまり、全体として大和盆地から淀川水系へのルートが庄内式新相段階以降に急速に重要度を増したと評価することができるのである。

庄内式期から布留式期にかけての大阪平野の南北地域と中央政権とのかかわりをこのように整理するなら、当該期の墳墓形態において摂津と大和が円丘系の採用によって共通性を強めていく一方で、河内のそれがあくまでも伝統的な方丘系に終始した事実の裏には、たんなる墳墓形態にとどまらない政治的な立場の違いが隠されているように思われるのである。そして、庄内式新相段階を境に生じたこの地域関係の変化は、大和で成立した前方後円墳の波及が中・南河内や和泉の地域では少しく遅れ、逆に、大和の前方後円墳築造の勢いが弱まる4世紀後葉以降になると中・南河内、和泉に列島屈指の大古墳群が展開するといった政治的な「振り子現象」の出発点になった可能性さえうかがえるのである。

5　おわりに

本稿で整理した「円丘の摂津、方丘の河内」という墳墓スタイルの違い

が、初期大和政権成立へと向かう流動期に生じた大和、河内、摂津の微妙な立場の違いを反映しているのではないか。より具体的には庄内式新相段階以降に淀川水系で結ばれる大和、摂津の間に墳墓形態や銅鏡入手の点で密接な関係が形成されるのに対して、大和と中・南河内との関係はこれ以後やや疎遠なものに転じていき、そのことが後の前期古墳さらには中期古墳の展開のあり方にまで遠く影響を及ぼしているのではないか。

以上が本稿の仮説であるが、古墳時代史の大きな問題にかかわるだけに、さらに分析、検討が必要な要素も多い。ただ、庄内式期という数十年の間にも地域関係は急速に動いており、それを検討できるほどに３世紀の考古資料が充実してきたことだけは、まず疑いのない事実であろう。

註

1）庄内式期の墳墓自体の検出例が依然として不十分である大阪平野においては、暫定的にでも首長墓と認定できる事例数は限定される。また、主体部が削平された埋没周溝墓が多い。

2）郡遺跡の事例を論文中で紹介した調査者の濱野俊一氏は、壺棺の編年的位置を庄内式新相あたりにおいており、おおむね妥当な理解と思われる（濱野2003）。

3）郡遺跡出土の倣製鏡は、古墳時代の古式倣製鏡に連なるタイプとは異なり、重圏文が施される「弥生系」のものである。弥生終末期に出土する倣製鏡は径10㎝未満のものが大半であり、径12㎝の郡遺跡の鏡は京都府芝ケ原墳墓出土の四獣形鏡とならんで最大級の事例となる。

4）墳墓群内での相対的な墳丘規模から見て、２号墓、５号墓などを首長墓に含めるのは厳密には不適当であるが、大阪平野では名実ともに首長墓に分類できる事例が少ないことから、ここではそれに準ずる扱いをしておきたい。

5）方形周溝墓の一部に突出部が認められるという形状自体としては、和泉市、泉大津市にまたがる池上曽根遺跡Ｆ地区Ｂ号方形周溝墓で、弥生中期の事例がある（前田ほか1970）。しかし、庄内式期にあらわれ、古墳の前方部へと展開していくような突出部とは時期的にも懸隔がある。

6）高安受水場の工事に伴って調査された郡川遺跡では、調査区内から方形周溝墓１基、円形周溝墓３基が確認されており、限られた面積ではあるが円形

墓が多数派となっている。もしそれが郡川遺跡全体の傾向であったとしても、他の遺跡のあり方をふまえるなら、河内地域の中ではきわめて例外的な事例と見てよかろう。

7）岸本一宏氏は、近年の事例をふまえて、庄内式期の円丘墓が摂津地域に中心を持つことを評価している（岸本－2002）。

8）摂津では、小方墳ながら三角縁神獣鏡を含む魏代の舶載鏡を５面副葬する高槻市安満宮山古墳も１期の築造と考えられる。

9）鍋塚古墳の埋葬施設は狭いトレンチ内で一部が調査されただけであるが、結晶片岩の板石が多用されているということである。現状の情報では、埋葬施設が東西主軸となる可能性が高い。鍋塚古墳では葺石にも結晶片岩が使用されている。結晶片岩の使用や東西主軸埋葬というあり方は東四国（阿波）地域との共通点であり、茨木市将軍山古墳の例を想起するまでもなく、畿内にあっては淀川流域の首長墳の一部に顕著に認められる特徴である。石材の問題は、古墳時代開始期前後に北河内の有力集団が中・南河内とは異なる首長ネットワークに与し始めたことを示唆する手がかりとなろう。

10）北河内において、中・南河内と同様の方丘系墳墓を造営してきた集団が、地域内の「覇権」を維持したまま円丘系の採用へと向かったのか、その際に地域内の別の首長系譜があらたに台頭したのかは興味深い問題である。すでに破壊され消滅したが、前方後円墳の可能性があった枚方市万年山古墳は、庄内式期の方形首長墓である中宮ドンバ１号墓とは天野川の谷を隔てて対峙する丘陵上に存在していた。

11）画文帯神獣鏡と同じく庄内式期に列島への流入が始まる上方作系獣帯鏡も文様は簡素になっているが神獣鏡の仲間である。銅鏡の格としては画文帯神獣鏡よりやや下位に位置づけられようが、この分布にも邪馬台国政権の政治的意図が多少なりとも反映している可能性を考えて表１に加えている。筆者が神獣鏡という鏡種をとくに重視するのは、邪馬台国政権期の首長層に共有された宗教的価値観として、神仙思想に注目しているからである。なお、表１には三角縁神獣鏡と同じ頃に製作されたあきらかな魏鏡も含めている。

12）摂津三島では、邪馬台国政権前期段階に流通の盛期を持つ神獣鏡としては茨木市安威０号墳の上方作系獣帯鏡（六像式）が１面だけ出土している。筆者は六像式のものを画文帯神獣鏡に次ぐランクの神獣鏡と見ているので（福永 2001a）、中央政権とその程度の関係は有していたものと推定する。

13）さらに１期の 120 mの前方後円墳である高槻市岡本山古墳にも、古相三角縁神獣鏡が副葬されている可能性はきわめて高い。

14）枚方市藤田山古墳からは画文帯神獣鏡が出土しているが、「顔氏作」銘や

長方形鈕孔を有しており、古相三角縁神獣鏡と同時代の魏鏡と考えるのが妥当である。

15）六甲南麓地域の首長層は画文帯神獣鏡、三角縁神獣鏡ともに潤沢に入手しており、一貫して大和盆地勢力の重要な政治的パートナーであったと評価できる。

参考文献

赤木克視・森屋美佐子・三好好一編 1987『久宝寺南（その１）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

浅岡敏夫編 2000『口酒井遺跡 ──第１次～第 10 次・第 12 次～第 16 次調査の概要──』伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会

石部正志 1979「考古編」『岸和田市史』第１巻　自然・考古編　岸和田市

一瀬和夫編 1987『久宝寺南（その２） ──久宝寺・加美遺跡の調査──』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

茨木市教育委員会 2000『大阪府茨木市平成 11 年度発掘調査概報』

大竹弘之 1988「中宮ドンバ遺跡」『第 24 回埋蔵文化財研究集会　定型化する古墳以前の墓制』埋蔵文化財研究会

大庭重信編 2005『長原遺跡発掘調査報告 XII』（財）大阪市文化財協会

橿原考古学研究所編 2001『ホケノ山古墳調査概報』学生社

交野市教育委員会編 2003「鍋塚古墳 2001-1 次調査」『交野市埋蔵文化財調査報告 2002- Ⅱ』交野市教育委員会

川崎公敏・近藤義行編 1987『芝ケ原古墳』城陽市教育委員会

岸本一宏 2002「弥生時代の低地円丘墓」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号　兵庫県教育委員会

岸本道昭 1999「播磨弥生社会はどう変わったか」『みずほ』第 30 号　大和弥生文化の会

木下保明 2004『大阪府寝屋川市小路遺跡（その３）』（財）大阪府文化財センター

京嶋覚 1991「群集土壙の性格と意義」（永島暉臣慎ほか編『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ　前編』）大阪市文化財協会

黒坂秀樹編 2001『古保利古墳群第１次確認調査報告書』高月町教育委員会

嶋村友子編 1986『成法寺遺跡発掘調査概要Ⅰ ──八尾市南本町所在──』大阪府教育委員会

清水篤 1996「豊島北遺跡第３次」『豊中市埋蔵文化財年報』４　豊中市教育委員会

田中清美 1986「加美遺跡発掘調査の成果」『加美遺跡の検討』古代を考える 43 古代を考える会
中村浩編 1987『下池田遺跡第２次発掘調査報告』岸和田遺跡調査会
西岡巧次・池野素子 1987「郡家遺跡（城の前地区第５・６・７・９·11 次）」『昭和 59 年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
西口陽一 1990「畿内の群集土壙墓」『考古学研究』第 37 巻第１号
橋本輝彦編 2006『東田大塚古墳 ――奈良盆地東南部における纒向型前方後円墳の調査』（財）桜井市文化財協会
服部聡志・清家章 1996「服部遺跡第４次」『豊中市埋蔵文化財年報』４　豊中市教育委員会
原口正三編 2005『新修豊中市史第４巻』豊中市
濱野俊一 2003「大阪府郡遺跡出土の土器棺と小形仿製鏡について」（石野博信編『初期古墳と大和の考古学』）学生社
広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」（近藤義郎編『前方後円墳集成』近畿編）山川出版社
福永伸哉 1996「舶載三角縁神獣鏡の製作年代」『待兼山論叢』第 30 号　大阪大学文学部
福永伸哉 1989「古墳時代の共同墓地 ――密集型土壙群の評価について――」『待兼山論叢』第 23 号　大阪大学文学部
福永伸哉 1998「銅鐸から銅鏡へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
福永伸哉 2001a「画文帯神獣鏡と邪馬台国政権」『東アジアの古代文化』108 号
福永伸哉 2001b『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会
前田豊邦ほか 1970『池上・四ツ池』第２阪和国道内遺跡調査会
森田稔 1986「郡家遺跡（城の前地区）」『昭和 58 年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
森屋美佐子・亀井聡編 2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』（財）大阪府文化財センター
八尾市文化財調査研究会 1992『平成３年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
山下史朗編 1988『神戸市東灘区深江北町遺跡』兵庫県教育委員会
山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉編 1992『三田市川除・藤ノ木遺跡』兵庫県教育委員会
米田敏幸 2008「３世紀における河内平野の動向」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館

図１～４は本文中に記した参考文献から一部改変の上引用した。なお、英文抄訳の作成にあたって、佐々木憲一氏から多大な援助を得たことに感謝する。

（文学研究科教授）

SUMMARY

Political Significance of the Third Century Elite Burial Mounds in the Osaka Plain

Shinya FUKUNAGA

This paper approaches to the process behind the complex process of the appearance of highly-standardized keyhole-shaped tumuli in the Japanese archipelago in the middle third century A.D. This phenomenon was an important epoch that marked the beginning of the Kofun Period. The appearance of the keyhole-shaped tumuli whose mound forms were shared by elites of various regions also distinguished from the regionally-distinctive mortuary practices of the preceding Yayoi Period. Sharing of the keyhole-shape might indicate that elites of various regions were politically tied or unified. This political unification was under the direction of the highest-ranking chief in the Kinai region where the largest keyhole-shaped tumuli were erected from the middle third to the fourth centuries. However, we have little knowledge about mortuary practices of the Kinai region of the early third century. This has encouraged the author to examine in detail aspects of elite burial mounds in the early third century in the Osaka Plain, a nucleus area of Kinai. As a result, the author has clarified that, while circular burial mounds were dominant in the northern Osaka Plain, square burial mounds were dominant in the south. Since keyhole-shaped tumuli were dedicated to the dead buried in the circular rear mounds, the dominance of circular burial mounds in the northern Osaka Plain might indicate that elite in the early third century there maintained a close relationship with the highest-ranking chief in Yamato (present Nara Prefecture) where the standardized keyhole-shaped tumuli appeared for the first time in Japanese history.

keywords : keyhole-shaped tumulus, Yayoi burial mound, Yayoi period, Kofun period, Osaka plain